

まひつよく、目つり、口ゆがみ、或はものゝかたちいろくに見へ、またはものゝたゞりあるがごとく〔下略〕。』

「狂症まがらみとは、そのかたちふすことすくなく、氣たかぶり、たべんにして、言語善悪親疎のわかちなく、独語妄走水火をさけず、喜思笑罵、つねなく、かたち鬼神のごとく、其はなはだしきものは、身命をおしまぬものなり、かん病おこたるべからず〔下略〕。』

つまり、この癲狂では不安・抑うつ状態が優位しており、狂症では興奮状態が前面にでている。癲癇の記述は、現在のてんかん大発作に一致する。また、これらの病理および薬物療法も記載されている。この引き札の意義は、引用文のように、精神症状を一般のことばでのべている点にある(漢字は振り仮名つきである)。

(平成六年一月例会)

◇◇◇◇◇ 紹 介 ◇◇◇◇◇

齊藤信夫著『指の文化誌』

「ヒト」は直立歩行により道具を使いだし、結果知的行動を拡大して文明社会を形成して来たが、その中でも「指」は脳の精密工作機械として大きな役割を果している。

指の役割とその展開を、人文科学分野で捉えたものは皆無に等しいが、本書は新潟大学整形外科学教室・手の外科研究班で、長年手指の機能、病理解明に取り組まれた著者が、その研究過程で抱いた、指の呼び名の謂われにはじまるさまざまな疑問に対し、十年に余る歳月をかけ、東西文献の検索と綿密な調査研究結果を括め上げたもので、手の外科専門医としての医学理論と人文科学分野を巧みに交差した『指の文化誌』である。著者はまえがきで、言語学、民俗学の素人が書き貯めたカードの抄録集であると謙遜されているが、内容は入門書の域を越えた、医の文化誌、指の医史書として、未開の分野に大きな足跡を残すものである。

指と呼び方、指と伝達、指と数、指と尺度、指と宗教、指と礼法、指と契約、指と遊び、指とお洒落、指と諺、指と人間関係、指と俗信、指と謎謎、指と性、指と食、指と健康、指と犯罪、指と童話、指と運勢、指と干支、指と占い、指と

保護具、指と発弦楽器、指と歌謡曲で構成され、内容は拡範多岐にわたり、著者の意図と学績が伺える。

著者が本研究に着手された動機と指の呼称については、内外各国語、方語、機能面を系統学・言語学・民俗学面より対比、歴史的展開を加え整理している。まず人の指という字は、意味を表す「手」と音を表す「旨」からなる形声文字で、手の先の部分を示すものである。古来わが国に於ては、それが枝の先の条(コエダ)のようなどころから条躬(エミ)とし、さしだして物に及ぶということから及(オヨビ)の義であるとする(日本釈名)の説、万葉集・和名類聚鈔などに現れる呼び名の由来とその変遷を述べている。

その中で「薬指」を古来中国で「无名指」と呼んだが、日本最古の例は(奴婢見來帳)に見られる「名无指」で(名)と(无)が逆転していること。「無名指」(ナナシユビ)の音読み変遷。十三世紀にはじまるとされる「クスシノユビ」は、病氣平癒の願いをこめた薬師信仰の薬師如来像が、右第四指を曲げていることからの類推で、その印相から「薬師指」の名が起った由来を(江家次第)などに辿っている。

わが国の医学界における第四指の公式呼称は「薬指」であり、この指で薬を溶いたり、塗ったりしたことにもよる。上記薬師思想と共に、この指は機能的にも劣っており余り使用することがないため、五指中でもっとも汚れの少ない指で、薬調合に用いられたこと。医学用語として、手の五指を母指・示指・中指・環指・小指の組合せで呼んだわが国最初の文献

は(整骨撥乱)であるが、このうち母指以外は既に(解体新書)で使われた呼称であること。「薬指」の(大和言葉(クスリユビ)は学術用語にはなじみが悪く、漢字で二字の簡潔な訳語の方が適していたのか、解体新書もこれを用いて「環指」(指輪の指)としていること。各務総二も整骨撥乱の改訂版草稿では環指としながら、上梓された(整骨新書)では「無名指」としていることを述べ、さらに各国語の呼び名とわが国方言の分布などを比較検討され興味深い。

指と尺度では、日本・東洋・西洋の尺度についての共通点と相違点について述べ、わが国尺度表示の一つ、「あた」(咫)は八咫鏡などに出てくるが、手幅よりわずかに短い寸法で朝鮮半島よりの渡来語で、今日でも大工、指物師などの間で用いられていること。「つか」は手で掴んだほどの長さ、母指を除く四指の幅をいい、(源平盛衰記)の那須与一の扇的的の矢の長さは、十二束二伏(ふせ)であり、西洋の thumb も同義語である。これらは人がその住居、水田の計測に必要としたことにはじまることを起原より述べている。

指と食の中で、通常用いられている「食指が動く」という言葉は、手食の場合もつともよく使う指が第二指であることより、この指を「食指」と呼んだと、出典を左氏伝(俗所謂啜塩指也)に求めている。

指と物理学では、電気磁気学に指を使って記憶する方法を述べ、N極を指す母指、アンペールの右ねじの法則、フレミングの左・右手の法則なども図示され興味深い。

指と伝達では、手話の体系化は一七六〇年世界で始めて聾啞学校を開設したド・レペー、わが国では京都(後大阪)盲啞院の古河太四郎。手話と指文字のちがいがいなど詳しく述べている。

本書は、日常気づかず使用している指について、更めて考えさせられる好著である。

(石原 理年)

〔新潟雪書房・新潟市浦山三丁目一―二十八、電話〇二五―二六七一九二〇五、平成四年九月十五日、A五判、二二二頁、定価二二〇〇円(税込み)〕

### 大塚恭男著『東西生薬考』

東西ともに本草書が博物的色彩の強いことから、本草書＝博物書というイメージが強い。とくに近時の博物学ブームに加えて環境問題も加わって、自然の恵みである自然物(博物)に対する関心が高まり、博物図譜や本草書の複製も盛んで、それらに対する解説書・研究書の類も少なからず出てきている。それにも拘わらず、本草書本来の目的だった筈の医療面から見る解説書は意外に少ないのが現状である。

いうまでもないことだが、ヨーロッパで印刷された初期本草書は、グーテンベルクの印刷出版で知られるドイツに最初に出現するが、その性格は「家庭薬草療法書」の目的のものだった。そこでは写生薬草図が載せられているのは、古代古

典の本草書、なかんづくアラビア医学に採用され後代に強い影響を与えたディオスコリデスの『ギリシア本草』収載の薬草類の多くが、ドイツ圏内に見られないというフローラの相違から、実際の採薬旅行を経て写生された薬草が読者の理解を助長するため付図とされたためだった。

こうして古代古典に収載の薬草が中部ヨーロッパにほとんど見られないこと、古代古典はヨーロッパの全自然界を示すものでないこと、大航海時代の地理的知識の拡大と新世界からの自然物の新導入がルネサンス期ヨーロッパに博物学的開眼を促進し、新しい本草書編さんの機運を助長することになり、博物学的性格を深める結果になったとしても、本草書の主たる利用者は医療従事者だったことには変りはない。

東の中国でも版図の拡大から、王朝の替わる毎に種類を増した歴史本草書が出現し、本草文化遺産を伝承して医療面に貢献してきた。

薬理学を専攻した著者の育った環境から東洋の古典・生薬に直接ふれ目にする機会を持っていたこともあって、ドイツへ留学した機会に古典複製ブームに出会ったのも幸いして、一五―一八世紀の主要な西洋本草書を手入し、医薬学を通じて東洋と西洋の文化史を探りたいと念願するようになったのは当然の成行だったに違いない。

こうして、人間にとって有用性のある自然物を豊富に収載する本草書本来の目的である医療面からの視点で、東西本草書に見える同類植物の記載を比較文化的に把え、簡明に論